

2 認知力の低下した両膝人工関節置換術後患者のADL拡大に向けての援助 ―意欲に対する関わりについて―

○高橋 良実（赤穂市民病院）

I. はじめに

高齢者は、骨折に伴い、筋力低下、関節拘縮を起こしやすい。患者の意欲はリハビリの効果を左右する。今回、認知力・リハビリへの意欲が低下した患者に対し、どのような関わりがプラス面への変化と繋がっていったか明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象：A氏 77歳 女性 既往歴：両膝人工関節置換術 現病歴：右大腿骨顆上骨折・人工関節周囲骨折により右大腿骨観血的術
2. 介入研究：
 - 1) 疼痛緩和
 - 2) 運動療法（①上肢の運動②立位訓練・1分3セット③車椅子乗車・1日2回、1時間ずつ）
 - 3) 分かりやすい説明：パンフレット使用
 - 4) 意欲低下時の関わり：①塗り絵、歌など好きなことを取り入れる。②リハビリに否定的な時、説得でなく本人の気持ちが動くように話かける。
3. 倫理的配慮：平成21年度赤穂市民病院倫理委員会に申請し、実施の承認を受けた。

III. 結果

右大腿骨顆上骨折・右人工関節周囲骨折のため、右大腿骨骨折観血的術を施行。翌日より、全介助で40分車椅子乗車できた。そこで、興味・関心のある、塗り絵・歌を流すことを取り入れたところ、乗車時間を1日平均2～3時間へと延ばすことができた。上肢の運動は、パンフレットを使用し看護師も一緒に行った。カレンダーに丸を記入してもらい、達成したことを残し励みとなるようにした。A氏のペースを大切にに関わり、励ましの声かけをすることで、A氏に笑顔が見られた。立位訓練時、趣味や家庭の話をする中で、少しずつ表情、立位保持の時間、自ら下肢装具を装着するなどA氏の意欲にも変化が見られた。

IV. 結論

ADL拡大に意欲的でなかったA氏に対して、回復への意欲・努力を持ち続けさせることが大切と考えた。そのため、興味のある話や塗り絵・散歩などの気分転換を取り入れ、感情を他に向けたことは、運動を続けることができたきっかけとなった。また、励ましの声かけは、A氏の気持ちが動くシナリオとなった。貝塚らは「訓練意欲を左右する因子をはっきり認識し、個々の患者に照合し、問題を早期に発見し、その解決に努める役割がある。」と述べている。認知力低下があったため、パンフレットを用いてA氏・息子と共に繰り返し運動を行った。貝塚らは「訓練の効果をあげるには、反復訓練を根気よく続けることが原則。」また、奥野は「短期記憶を長期記憶に転送する機能、記憶した情報を整理して再び体制化する機能～中略～などが老年では低下している。」と述べている。このことから、認知力・意欲の低下のあるA氏に対し、看護師のみでなく家族も反復運動を行うことにより、A氏のリハビリに対する意欲に変化が見られた。